

児童文学からへ未来へへ ②

『千と千尋の神隠し』もしくはファンタジーの問題

井上乃武

はじめに

「物語」は、あるいは「文学」は私たちにとってどういう存在なのだろうか？

例えば批評理論の教科書には、「ポストモダンイズムは、イズムとして、イデオロギーとしては、ほとんど意味を持たない。それは、むしろ、既存の『自然』、『正当性』を読み直す批評的営為、つまり批評理論として意味を持つのであり、そのような理論の誕生が明らかにする、深く批判的な現状認識、世界観として意味があるのである。」と書かれている¹。この文章は、批評理論（文学理論）がその定義ではなく、それを用いることで得られる現状認識や世界認識において意味を持つことを示している。オルタナティブ・ファクトやポスト・トゥールースなどといった言葉への支持の広がりや考慮すれば、「現状」や「世界」を批判的に認識することの重要性は疑いようもない。だがその一方で、批評理論は、自分に都合のよいものだけを見たがる人

間たちに対して十分な力を持っていないように思える。今回は、アニメ『千と千尋の神隠し』の分析を通して、このご都合主義的な立場に対峙する方法を探っていきたい。

1 宮崎駿アニメにおける「自然」と「人間」

宮崎駿のアニメにおいて、自然破壊、あるいは自然と人間の共存という問題が重要な位置を占めていることはあらためて言うことでもない。『風の谷のナウシカ』の背景には核戦争による地球環境の破壊があるし、『もののけ姫』では太古の森が人間によって破壊されていくさまが描かれている。ただ、ここで注目しておくべきなのは、彼の作品において、自然というものが、ただただ保護されるべきものとして描かれているわけではないということだ（これも別段新奇な指摘ではない）。もちろん、宮崎が現在の自然破壊に批判的であることは確かだが、それと同時に、作品から自然を破壊する存在である人間が自然とどう共存して